

氏 名	久 保 智 史
学 位 の 種 類	博士 (美術)
学 位 記 番 号	博美第5号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題 目	学位論文題目 点から線、線から形へと連係する絵画とは何か — 自作を中心に、点・線・形・色彩が、絵具や素材とどのように連携するかを考察する —
	研究作品題目 続く宇宙 変わる宇宙 (388 x 259cm) 内部観測 (112 x 145.5cm) 眠らないの絵 (112 x 145.5cm) 壁から地平 (130.3 x 130.3cm) 太陽はわらっている (130.3 x 162cm) ボール (直径 40cm) 連山 (70 x 30cm) 机の間 (76 x 77cm) 体 (直径 90cm) ぼくの風景 (90 x 150cm)
論文審査委員	主 査 教 授 山 本 富 章 副 査 教 授 小 林 英 樹 副 査 教 授 倉 地 久

1 学位論文の要旨

私の絵画は、画面に打った点と点を線で結んで出来て行く。点は線へ、線は形へと連係し、線に囲まれる形は色彩や物質性を有する絵具により表情を持ちながら先回する。また、素材に導かれるようにして新たな行為が生まれる。画面の物質感や素材の性質は、色彩や質感に対する新たな意識を呼び起こし、表面に凹凸を生み出させ、画面を多様化することを促してくれた。画面にあけた針穴を発端とする絵画制作に立脚しながらも、改めて自らの制作について見直した。その中で、私に潜在的にあった素材に対する意識に注目して、それを機軸のひとつとして、創作活動に取り組んだ。

また、私が常に求めてきたものとして、続いて行くかたちの連係について述べる。点と点を結んだ線に囲まれる形が、次々に関係を持ちながら見かけの多面体を作る。また、新たに現れてくる形と形の関係は、画面で刻々と変容する。更に、新たに点と点を結ぶことで、画面上には新しい局面が生まれ、それを受けて選択して行く。画面に現れる新たな局面と自分自身が一体化するように、描き出したものと素材に導かれる内的な欲求から出たものと絡み合いの中から、当初は想像もつかなかった展開が始まる。そして、多種多様な形が連係しながら、連帯をする壮大な世界へと拡がり続ける。形の連係により出来上がった絵画が、部分の集合でありながら、それらの形が相互に働きかけ合う姿として、観る人と接点を持つことで、更なる連係は生まれる。そのような絵画を求めな

がら制作を進めた。

第1章、第2章で、点から線、線から形へと連係する絵画について様々な視点、可能性を述べ、第3章では、自作を振り返り、解説することを通して、第1章から第2章までの中で述べた内容に基づき、実制作に取り組んできたことを明らかにする。

第1章では、点や線、線が作り出す形がどのような関係を持つのか、私の「絵画制作の原点」に立ち返って考察する。針穴として始まった展、その点と点を結んだ線が、やがて、星や宇宙空間が有する広大な空間とも重なることに、自らの体験を基にしなが、画面上に点在する点や線が表す絵画空間の奥深さを考察する。

第2章では、自作を中心に示しながら、点、線、形、絵具がどのように連係するのかを「絵画制作の方法」として考察する。線に囲まれる形の関係、図像と地の関係、形で画面を充填すること、離れたところにある二つ、あるいはそれ以上の形が相互にまたがり密接な関係にあるという飛地的な発想について述べる。また、連続的に展開する制作過程の中で、それぞれの形が持つ具体性が連鎖することを見立ての連鎖と呼ぶことにしているが、それについても述べる。更に、形が連係し、立体視を生むことについても論じる。

第3章では、博士後期過程において制作した作品から43点を選んで、その基底材ごとに分類しながら、第1章、第2章で記述したことを踏まえ解説する。博士後期過程での様々な試行錯誤により、点から線、線から形へと連係する絵画が、基本的な方法論は変わらないにしても、多くの可能性を秘めていることを述べる。

私にとっての点は、何か生まれる源泉であり、穴としての点として捉えている。そして、針穴を星や宇宙と重ねることで、広い空間に繋がることを実感した。自らの体験に基づきながら造形上の問題意識と関係付け、一見、画面上に同じように並ぶ点が、前後に異なる位置関係にあるという点に対する遠近の意識の違いについても述べた。そして、それらの点と線に囲まれる形を結び付けることによって、私の制作が、奥深い空間内で相互に作用し合う連係により進展する可能性を持つと考えた。

具体的な絵画制作の方法としては、図像と地の関係が崩れて行きながら形の連係が起こり、画面を充填するように形が拡がることで更なる連係が生まれることを確認した。また、画面に現れた形の関係により生まれる、見立ての連鎖が、絵画を一層豊かなものにするのを知った。更に、色彩と物質性を有する油絵具やアクリル絵具が、形の連係において、それらを繋ぐ役割となることを確認した。線に囲まれる形の関係において、色彩の対比と形の立体視、そして、画面の物質感が作り出す多層的な構造が、繋がる関係にあることが分かった。

最近作における実験的な試みとして、木製の板やガラス板を基底材としたとき、引っ掻いたり削ったりする要素が加わり、多重的な表現へと展開する新たな可能性が見えてきた。それは、同じ画面上にある点を結んでいった結果、画面に思わぬ形の集まりが生まれたことによる。また、より深化した絵画に連動する空間表現の可能性も見えてきた。

私は、全篇を通して、穴としての点、点と点を結んだ線、線に囲まれる形、色彩と物質性を有する絵具や素材に導かれる行為の連係により、点で作る世界、点の先へと繋がることを目指す自らの作品を念頭に入れながら記述した。それは、何かと何かの関係に注目し、小さな形が互いに連帯する世界と関わり、その世界が連続的に拡がり続けるこ

とを求めることを述べることであった。必ずしも、理論的な展開を遂げたとは言い難い部分もあるが、私の絵画が、豊かに人の心へと繋がることを願いながら制作したことを大切に、本論文を執筆した。

2 学位論文審査の要旨

久保智史は、学部における絵画制作のなかで絵画の基本要素である点に着目した作画手法から生まれた図形を、博士前期課程において簡明な図像に読み替える制作の繰り返しの中で、キャンバス上に任意に打った点と点をつなぐ行為を、形を花や人に見たてながら新しい作品として展開した。博士後期課程においてそれらの関係が徐々に新たな段階へと展開する自身の作画手法による更なる作品として提示し、それぞれの作品ごとに分析、論述した論文を提出した。

博士後期課程において研究する立脚点をさらに明確にしたいという姿勢は、意識下に潜んでいたものが突然スパークするように連関し形を現わす現象、作画行為を明らかにするために、自らの作画をデジタルカメラで一工程（一筆）ずつ記録し、自らの手による行為を客観的に分析する行為と、数十枚重ねた紙に穴をあけた「穴＝点」、それらを結び合わせてできる形の一枚ごとの明らかな変容を一連のものとして提示する行為とを併せ持つことから到達した、多重な視点に基づき生み出された具体性を提出作品が獲得しているという点において独自性を見出すことができる。

論文の前段にあたる第一章、第二章において人間の目（視点）がとらえた星座の形は象徴的な形象として人々に受けつがれ、地表に現れた地図上の飛地のような結果（形）として生み出されてしまった歴史的事実などに言及しながら、自身の点への視点が生命体という人間の生活から生まれていることを明らかにしている。セルという単位に還元されるという記述は、銀河系という宇宙空間のなかの一単位としての人の認識でもあり、それを構成する細胞という、マクロからミクロまでの拡がりとお行を獲得しようとする久保に内在する感性が示すもので、人間の根幹と大きな普遍性に通じるものとしている。後段となる第三章においては、自身の制作の実際を通して素材などの選択もあわせて、そのプロセスを分析しながら得られた結果を作品ごとにもう一度とらえ直しながら平易に記述することに努め、久保作品が目指す大きな世界に結び付け人々の心につなげようとする内容を示す試みとなっている。

点を出発点として展開する画面、集中する作業や旺盛な制作意欲はさまざまな展覧会において多様な形態の作品として公開され、3年間を通じた研究からもたらされた質の高さは高く評価されており、久保智史の学位申請の作品及び論文は博士の学位を与えるのに十分であると結論した。